



## グローバル化とハーモナイズ・アップの話

政策委員（北区支部） 佐藤 総太郎

昨年11月、北区支部勉強会で、北海道大学公共政策大学院教授の遠藤乾先生のお話を聞く機会を得ました。「これからの日本の政治はどうあるべきかーグローバル化と安心・安全」という題で講演をしていただきました。グローバル化という視点から、TPP関連の問題を考えていくことは、私にとっては新鮮な話でした。また、交渉の手法として、ヨーロッパの事情を参考にし、「ハーモナイズ・アップ原則」を例として出されています。今回は、この講演の内容と、私の感想を投稿させていただきます。

### グローバル化は止まらない

グローバル化とは、人・モノ・カネ・サービス・情報・病気・犯罪・汚染など、あらゆるものが「より遠くへ、より早く、より安く、より深く」越境していく過程である。「グローバル」というシンボルは、1970年代に一時期良いイメージを持っていたが、現在では、格差と貧困を生む疫病神など、悪いイメージで描かれることが多い。グローバル化は現在まだ発展途上で止まる気配がなく、これからも進んでいくことが予想される。日本独力で止められるものではなく、実は現在までその受益者でもある。TPPはグローバル化の一つの現れであり、うまくこれを避けたとしても必ずまた違う形で規制緩和を迫られるはずである。グローバル化が避けられないものとする、大切なのは舵取りの方向である。日本にとって何が利益かを考え、そこに向かって導いていくべきだと考える。

### デンマーク発の「ハーモナイズ・アップ原則」

ヨーロッパは相互依存とそのマネジメントについて多くの経験を持ち合わせる中規模の国家

の集積であり、日本がそこから学べることは多いと思われる。1980年代半ばのECはダイナミックな改編期を迎えていた。遷延していた欧州悲観主義をばねにして、非関税障壁の撤廃を軸とする域内市場の自由化と、そのために必要な多数決導入を核とする意思決定メカニズムの改革に乗り出そうとしていたのである。

ここで注目したいのは、この政府間交渉に遅れて参入した小国デンマークの論理と手法である。デンマークは交渉参加にあたり、貿易自由化が規制緩和を伴い、自国で積み上げた環境保全や消費者保護にかかわる規制が台無しになる可能性を強く危惧していたし、そうした規制緩和に対する拒否権が多数決採用の結果奪われる事態を憂慮していた。それに対してデンマークは、「ハーモナイズ・アップの原則」を掲げ、自国の良質な規制とその下でビジネスを展開している自国産業を守ろうとした。「ハーモナイズ・アップの原則」とは、簡単に言うと、通常FTAなど自由貿易の試みにおいて、貿易自由化と一国の規制が衝突した場合、前者が優先するが、環境や安全といった領域における良質な規制がある国で存在する場合はその上等な規制に合わせて規制を改善することはあっても、劣悪な規制に合わせて規制緩和することはないという原則である。

この原則には、上質な環境・安全規制を守り、その下で発展してきた自国産業を守る意図が込められていた。そして、同時に自国の利益に資するばかりではなく、他国（民）の利益にもなる（と提示する）普遍的な装いに包まれたものであった。この点が特に重要であり、普遍的な仕掛けの中で原則の旗を立てながら、他国の利益にもなるものとして、自国の利益を

守ったのである。

### 日本はどうするべきか

グローバル化が不可避で、手を替え品を替え、貿易ルールをはじめとする他国とのすり合わせが不可避な時代に生きる日本にとって、多国間で長きにわたりぎりぎりの調整を続けてきたEUから学べる教訓は多い。そして、ときに一方主義的な行動に走るアメリカや中国のような目の前の強大国からは出てきにくい示唆もある。

一般にパワーで相手を圧倒できない国が自国産業を守りたい場合、他国民からの共感是不可欠である。その共感に訴えかけるには、自由化すると自国産業AやBが窮地に陥りますからという理論では不十分である。窮地に陥る自国産業を守るのであれば、いっそう相手国の人々の利益にもなるような橋渡しの論理が必要なのである。

以上、紙面の都合もあり、私の独断と偏見で抜粋してみました。

遠藤先生の講演をもとに、医療に目を向けると、日本には国民皆保険という上質な医療システムがあります。「ハーモナイズ・アップの原則」にならって、例えば「安心医療」などの旗を掲げ、それに共感を示す集団を探し、ともに戦っていくこと、となるのでしょうか？

ヨーロッパ経済史に精通される遠藤乾先生の話は、私にとっては今までと違った視点をもつことができ、とてもためになりました。

しかし、TPP交渉の秘密主義や、市場や圧力団体の影響が強いアメリカ政府、などは、また別の問題でしょう。

参考文献：「グローバル化2.0－TPP賛否両極論を排す」(遠藤乾先生著)

(新琴似内科クリニック)